

LA 立教会だより

<http://www.larikkukai.com>

May 2015



St. Paul's Rikkyo University
Alumni Club at Los Angeles

会長からのメッセージ

LA立教会の会員の皆様、お元気でいらっしゃいますか？ 去る3月7日の総会により、出席者の皆様そして、委任状を頂いた方々の推薦により新会長に選ばれました。

1977年経済卒の谷則安と申します。

1961年3月25日に設立された歴史あるこの会の会長になったことは、身にあまる光栄であります。私に務まるものか不安でもありますが、素晴らしい先輩方のご指導ご鞭撻のもとに精一杯頑張りたいと思いますので何卒宜しくお願い申し上げます。

私と立教学院との関係は、小学校1年生まで遡ります。兄も姉も立教に通いました。まさに立教ファミリーです。いまでも付き合いの深い小学校時代の親友たちが沢山います。

小学校のある日の朝礼でイギリスから帰っていらっしゃった酒向校長先生が『フレンドシップ=絆』という英語を生徒に説明して、みんなでその言葉を大きな声で復唱したことを今でも覚えています。それ以来フレンドシップという言葉が大好きになりました。

これから、会員の皆さんと一緒に立教学院で学んだ、フレンドシップと学院並びに社会の為に微力ながらも、少しでもお役に立てるような会にしていきたいと思ひます。

そして、いつでも笑って会えるような楽しく、気楽な会を皆さんと一緒に作って行きたいと思ひます。
よろしくお祈りいたします。

谷 則安
Nori Tani

CALENDAR OF EVENTS

本年度の予定イベント

6月7日第31回南加大学同窓会対抗ゴルフトーナメント

6月20日(土) 第8回日米交流ロサンゼルス朗読会

BBQ Party & 新会員歓迎会

日時は追ってお知らせいたします。

クリスマス会 12月、詳しい場所日時は追ってお知らせいたします。

INSIDE THIS ISSUE

会長からのメッセージ	1
新役員からの自己紹介	2
私からあなたへ恩送り / Love to Nippon Project 実行委員 上井貴代子	5
第8回「日米交流ロサンゼルス朗読会」実施要項	10

新役員

会長	谷 則安	1977年卒	経済学部経済学科
副会長	皆見 友紀子	1994年卒	文学部英米文学科
副会長	熊代 真一郎	1987年卒	経済学部経営学科
監査	小田 清	1971年卒	経済学部経済学科
広報	曲 清光	2001年卒	経済学部経済学科
財務	安達 さと子	1981年卒	文学部キリスト教学科
アドバイザー	岸野 豊	1975年卒	文学部キリスト教学科

新役員からの自己紹介

皆見友紀子 1994年卒 文学部英米文学科

中学、高校の6年間を大阪プール学院という女子校で過ごし、姉妹校でもある立教大学に推薦入学させて頂きました。

大学時代は体育会応援団チアリーディングに入部し、一年生の秋には六大学野球で立教が優勝し、立教大学の周りの道路が交通止めになる中、優勝パレードで躍らせて頂いたり、NHK杯全日本チアリーディング選手権で準優勝をしてNHKに出演。幹部時代には東京六大学連盟委員とキャプテンをさせて頂くなど、立教で青春を謳歌させて頂きました。

大学卒業と同時に校友会代議員に選出され、卒業以来代議員をずっと務めさせて頂いています。今は日本企業のアメリカ進出支援などを産官学の角度から行わせて頂いております。この度副会長に就任させて頂きましたことは、身に余る光栄です。全力で頑張りたいと思いますのでご指導、ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

熊代真一郎 1987年経済学部経営学科卒

立教は大学からで、高校は埼玉の県立校でした。

在学中に東京の江東区に引っ越す迄は、埼玉の家から毎日2時間近くかけて通っていました。

当時は、テニス、スキーの同好会の全盛時代、軟式野球がやりたいと思いながらも、その流れに乗ってしまいテニスの同好会に所属、テニスは好きだったものの、結局、途中から、なぜか埼玉の草野球チームでの活動が主流に。

卒業後、都内の不動産会社に就職、まさにバブル絶頂期の時代で、いくらでも出すから借りてくれという銀行のバックアップで、その会社がロスアンゼルスを中心に不動産物件を買い漁っていた事もあり、財務担当として1991年にロスに赴任。

ところが赴任間もなくバブル崩壊、銀行から追加担保を入れろ、返済を始めろ、物件を売却して金を返せと手の平を返した攻撃の矢面に立たされ、なぜ私かと思いながらも、踏ん張っている間に、先に銀行のほうで潰れてしまうという時代を経験。

2005年に、5年間だけと決め、北カリフォルニアのナパにある日本のゲーム会社が所有する不動産物件の管理運営の仕事に転職、その時に、場所柄、今までまったく縁のなかったワインの世界も知る事が出来、満喫はしたものの、やっぱりロスがいいと、2010年に慣れ親しんだこの地に舞い戻ってきました。

今は、日系の自動車部品関連の会社で経理をしています、車の事はまったくわからないのですが。週末は、妻と一緒にチーム伊藤忠でソフトボールをし、秋のJBAソフトボールトーナメントでは、妻の職場の日本通運のチームでプレーし、現在2年続けて3位と、もうちょっとで優勝に手が届かないという悔しい思いをしています。

これから、谷会長のもと、LA立教会の発展に少しでも役立てればと微力ながらがんばってまいりますので、何卒よろしくお願い致します。

岸野豊 1975年卒 文学部キリスト教学科

私は1952年東京の文京区、巣鴨の年寄りの銀座と言われるお地蔵様の商店街の出身です。幼稚園から中学まではお茶の水女子大学の付属校で立教との関係は立教高校に入った時から始まります。立教がキリスト教にもとづく自由の学府と呼ばれるその精神はChristianの家に育った私には大切なことでした。

私の両親はお互い若い時キリスト教会に通ううちに洗礼を受け、私もまだ赤ちゃんの時から教会に両親に連れていかれました。幼心に感じたことは、私は今愛されているということです。

ですから、高校を選ぶとき、立教高校を選んだのもキリスト教の精神に基づく自由の学府という言葉でした。しかし、経済学部での授業ははっきり言って面白くなかった。それよりできたら一年アメリカの高校で勉強したいと思うようになったのです。祖父も日本で高等学校を卒業した後、アメリカに移民候補として来たのですが、1906年、San Franciscoを襲った大地震と日本の両親から送られた日露戦争への徴兵という赤紙を受けて日本に帰りました。

私は大学時代はアルバイトで夜間、渋谷のハチ公口Berlitz language schoolで働きました。

1975年PennsylvaniaにあるGettysburg Lutheran Seminary (神学校)で牧師となる資格を受けました。1978年家内Nancy Daubertと結婚した後、Philadelphia, PA., Plano TX. で牧師として働き、1985に南カリフォルニアに移り今日に至っています。

今年64歳ですからいわゆる過渡期の人生をどのようにして過ごしたらいいのかと感じるようになりました。しかし、自分だけの幸福を求めるのではなく、どれだけ隣人と関わりながら愛し、愛される人生を送ることができたらなんと素晴らしいことだろうと考えるこの頃です。

立教大学は6大学と呼ばれる東京にある大学の中で一番小さい大学だそうですが、それなりに人と人との人間関係を結ぶには最適な大学でもあると思います。ですから、その仲間の人と人の付き合い、関係を大切に生きてゆく私たちであるように願います。

ところで、私の娘に7月の半ばに男の赤ちゃんが生まれる予定です。そこでまた自分の人生を振り返って見てこれからの人生もどのように生きていけるかどう考えられる時が来るでしょう。

安達さと子 1981年卒 文学部キリスト教学科

小さい時から養父の影響でピアノと歌とスキーが大好きで、大学は皆川達夫先生（キリスト教音楽）のいらっしゃるキリスト教学科に迷わず入学しました。大学在学中は一生分のスキーもしました。卒業後は医療器械の会社に勤務。1997年夫のアメリカ勤務のため家族みなでIrvineに引っ越しました。その後夫が会社を辞め神学校に行き牧師になるという全く予測していなかった事態になりました。

現在教会付属のプリスクール（Huntington Beach）で平日は3歳児のお世話をしています。日曜日は教会でオルガンやピアノをひいています。毎日忙しいです。同居の家族は夫と次男とチワワのももちゃんです。立教会の会計は私向きの仕事ではないのですが、とりあえずがんばらせていただいています。肝心のところは影武者（影の割に目立っているかも）が用をしてくれています。

まだ一度もお会いしていない会員の方がいらっしゃいますので、ぜひお会いしたいなあと願っております。皆様どうぞお気楽にお集まりにいらしてください。どなたかスキーも誘って下さいませ。

最後にこの場を借りまして、年会費を納めて下さった方々にお礼を申し上げます。会から毎年東日本大震災の献金が出来ますのも皆様のお陰です。

曲 清光 2001年卒 経済学部経済学科

山口県山陽小野田市（旧小野田市）出身です。地元の県立小野田高校を卒業後、千葉の私立大学を経て1999年に立教大学へ編入学。2001年に卒業をしました。専攻は経営管理学です。大学卒業後は、神道系・宗教法人の聖職者となるべく、2年間のトレーニングを受け2003年にアメリカへ派遣されました。当初より教団バックオフィスの管理をメインに担当し、業務をしながら、公認会計士試験に合格。その後現在の会計事務所に2010年に移籍しました。聖職者として教団の管理業務の監督を行いつつ、会計事務所にて監査や税務の仕事をしています。

2014年4月よりテキサス州サンアントニオ市に移住。遠方の為なかなか行事参加は難しいですが、ウェブサイト管理を通じて、LA立教会発展のお手伝いができればよいなと思っております。宜しくお願い致します。

小田 清 1971年卒 経済学部経済学科

LA立教会の会長として3年間勤めさせていただき、今回監査役という形で引き続き役員を務めることになりました静岡市出身の小田清です。

私は1964年東京オリンピック開催の年に立教高校入学、1971年経済学部経済学科を卒業しました。大学生時代は学園紛争の最中で大学が閉鎖となり、1969年初めて米国を訪れました。卒業後10年間日本で働き、1981年コロラド州デンバー市で念願であった米国での起業をしました。1988年には日本の商社の生産部門立上げのため、ワイフと子供二人を連れてカリフォルニア州アーバイン市に引っ越し、その後は日本、シンガポールを経て、2003年再びオレンジ郡に帰ってきました。2008年会社勤めをリタイアしてからは、関西出身でもないのにロサンゼルス関西クラブの会長、立教会会長をお引き受けし、今年からオレンジ郡日系人協会（OCJAA）のボードメンバーとして

ボランティアに精を出しています。多彩な人材のいるLA立教会を盛り上げるため、皆さん、ぜひご協力をお願いします。

谷 則安 1977年卒 経済学部経済学科

私は3人兄妹の末っ子で生まれまして、家業は板橋の小さな町工場でありました。けして裕福な家庭ではありませんでしたが、両親が子供にはしっかりとした教育を受けさせたいということで3人兄妹みな小学校から立教に入学させて頂きました。

立教小学校の音楽の先生のお陰でフルートと出会い、中学では後に天才ジャズギタリストと言われたギタリストと友達になり、高校、大学と立教に行きながら音楽活動をしていました。

大学時代はジャズ演奏以外にディスコバンド、尾藤イサオバンド、ジュディー・オング、数多くの歌謡曲・演歌歌手のバックを行い、水前寺清子さんのバックバンドを最後にミュージシャンから足を洗い、1980年にロサンゼルスに来ました。

英語もろくに喋れないその頃、アメリカ人の中に入って行くのにジャズは大いに役立ちました。ジャズを通して沢山の友達を作りました。

初めは共同貿易に入社し、トラックを運転して日本食をレストランに配達しておりました。2年足らずで退社し、友人の勤めるビデオ会社でフリーランスとしてコーディネーターを始めて、日本のCM、テレビ番組の仕事をしておりました。1984年にアメリカ人の女性と結婚して、彼女が日本語を勉強し始めた関係から日本に住みたいということで、1987年～1991年の4年間日本に一時帰国しました。その頃の日本はちょうどバブル経済の絶頂期で、その当時の人気番組『なるほどザ・ワールド』そして、『クイズ世界はSHOW byショーバイ』のプロデューサーになり、沢山の国々に撮影に行きました。1991年の夏にLAに帰ってきまして、ROBIN/TANI MEDIA FACTORY INC. を設立して今日に至っております。番組・音楽プロデュースのかたわら、ジャズ演奏家としても演奏活動を行っております。そんな生い立ちで立教に行ったお陰で、音楽と出会い、友達と出会い、立教に入学させてくれた両親には言葉では言い表せないくらいの感謝をしております。

そして同時に人生に大きな財産を与えてくれた立教に少しでも恩返しが出来たらと思います。このLA立教会は会員の皆様の為の会であります。会員の皆様と一緒にあって、楽しくそして、地域社会と、立教の為に奉仕の精神で進んで行きたいと思っております。どうぞよろしく申し上げます。

QOLA 2015年3月1日号にて、LA立教会会員の上井貴代子さまの記事が掲載されました。



私からあなたへ恩送り／Love to Nippon Project 実行委員 上井貴代子

『一步踏み出すことの大切さを身をもって伝えて行きたい』
聖書の言葉がボランティア活動を後押し

2011年に東日本大震災追悼集会を推進するLove to Nippon Projectが発足され、そのお手伝いをするようになって、もう4年目になります。父親がクリスチャンだった影響もあり、ミッション系の学校に進学したのですが、振り返ってみれば、私が今こうしてボランティア活動をしているのは、学生時代に読んだ聖書の言葉が大きく影響していると思います。

1937年、目白に6人姉妹の長女として生まれました。友達には一人っ子がたくさんいて、何でも欲しい物を買ってもらっていたのを見て、母親に自分も一人っ子だったら良かったなどと言う困った子供だったと思います。小学校1年生の時に戦争が始まったので、茨城の大洗にあった友人家族の別荘で疎開生活を送りました。母親が着物を売って食べ物や子供服を調達してくれたり、両親が慣れない畑仕事をして私たちを食べさせてくれました。生活は決して楽ではありませんで

したが、それでもあの頃の経験が私たち姉妹を健康でたくましい人間に成長させてくれたと思います。

父は銀行員で、経済的に余裕のある家ではなかったのですが、子供たちに残せるものは教育だと言って、姉妹6人全員を大学まで進学させてくれました。私が通った高校、大学には、外国からの宣教師や英語の教師がいたので、本場の英語に触れる機会がたくさんありました。思い返せば、そこで私は英語に興味を持ったのだと思います。

立教大学卒業後の1959年に三井物産に就職しました。当時は大卒の女性の仕事といえば、男性社員のサポートとお茶汲みといったアシスタント的なものに限られていた時代でした。その後、東京オリンピック開催の年に、私も何かオリンピックに関わる仕事がしたいと、アメリカ人が経営する旅行会社で営業兼ガイドとして雇われました。そこで働いている時に、ちょうど日本を訪れていた日系3世の主人と出逢い、1967年にロサンゼルスに渡米、そして翌年結婚しました。

子育てをしながらめまぐるしく多忙な日々



(左) 忙しく子育てをしながら会計の勉強をしていた頃。クリスマスの朝に息子さんと娘さんと一緒に (右) 1996年、息子さんの大学卒業時に家族と共に記念撮影

渡米してすぐに、友達作りの意味もあって、AAJUW (American Association of Japanese University Women) の活動に参加しました。子育てをしながら働こうとも考えましたが、義父から「アメリカでは出身大学は重要ではない。あなたに何ができるのか。会社にどうやって貢献するのが問われるよ」と言われました。日本の会社ではアシスタント業務しかしてこなかったわけですからタイピングができるわけでもなく、英語が話せても、アメリカでは当然強味にもなりません。そこで数学が好きだったので、会計の勉強でもしてみようと思い、子育てをしながらアダルトスクールに通い始めました。そうこうしているうちに、友達から帳簿をつけてほしいと頼まれるようになり、在宅で会計の仕事を手伝うようになりました。子供が中学校に上がったのを機に、建築家の高瀬隼彦さんの事務所、Takase Associatesで5年、三菱レイヨンで5年、そしてKing International Groupというコンサルティングファームで10年働かせていただきました。

退職したのは2002年。ちょうど65歳を迎えた時に、主人が病気で倒れてしまったのがきっかけです。それまでお互い忙しく働いてばかりで、夫婦水入らずでゆっくりと過ごすこともありませんでした。既に子供たちも巣立っていましたので、これを機に主人共々引退することにしました。

主人は2004年12月に心不全で亡くなったのですが、この2年間があったお蔭で、二人で一緒に日本へ旅行に行ったり、旧友を訪ねたり、朝もゆっくり過ごせる引退生活を精一杯楽しむことができました。その反動もあって、主人が急逝した時は心の中にぽっかりと穴が開いたような虚無感と寂しさに襲われました。「これからどうしたらいいのでしょうか」と祈っていると、「あなたには自由な時間をたくさん与えるよ」という声がどこからか聞こえてきました。「そうだ、この自由な与えられた時間をこれからは教会や、助けが要る人のために奉仕したい」と思いました。すると心が晴れてきて、実際にどんどんと忙しくなってきたのです。教会では長老や礼拝部で奉仕し、それ以外の活動として女声コーラス森の会、日米婦人会、米国書道研究会、LA立教会でもボランティア活動を精力的に行いました。

以前にも増して忙しい毎日を送っていたのですが、2011年1月に目の辺りに激痛を感じて夜中に飛び起きました。病院に駆け込むと、急性の緑内障と診断され緊急手術になりました。視力が急激に落ちてしまったため、医者からは運転禁止、自宅で絶対安静と言い渡されました。あまりに多忙を極める日々に、きっと神様が休みなさいと休息の時間を与えてくださったのだと思いました。

東日本復興のために私にできること



(左上) 大船渡湾の美しい景観。この平和な湾に大津波が入り込んできたのが信じられないほど

(左下) 2014年訪問時に老人ホームで飾り皿作り教室を開催。被災者たちと触れ合う時

間を大切にしている

(右上) 2012年大船渡にて。流された車の残骸がまだ残っていた
(中央右) 2011年、震災後の大船渡の街並み。建物は残っているが中は残骸ばかり
(右下) 幼稚園にも積極的に訪れ、手編みの帽子、キャンディーなどを届けている

そんな時にあの3.11東日本大震災が起こったんです。AAJUWでチャリティーコンサートを催したり、教会で募金活動を行い、集まった義援金や物資をすぐに日本に送りました。テレビなどで被災地の惨状を見ると自分に何かできないだろうかと居ても立っても居られない気持ちでした。ある日、宮城県気仙沼市で被災した鶴浦真紗子さんという方の新聞の記事が目にとまりました。それを読んですぐに掲載されていたメールアドレスに連絡をして、お手伝いさせてほしいと願い出ました。真紗子さんから5月にロサンゼルスに戻ってくるので、その時に会いましょうと被災地から返信をいただいた時に、ロサンゼルス在住の方だと知りました。

初めてお会いした時に、大船渡サポートセンターを立ち上げたので、まずは町の様子を見に来てほしいと言われました。たまたま11月に日本に行く予定だったので、真紗子さんの地元でもある大船渡まで足を伸ばす約束をしました。そこで、ボランティアをしているサン・フェルナンド・バレーのシニアガーデンの皆さんにお話をしたら、ヘルプしたいと申し出てくれて。寒い東北に住む皆さんのために、マフラーを編んでくださいました。私が11月に被災地を訪問するまでに100本以上ものマフラーが集まりました。

しかし、いざ出発となると、一緒に行く予定の友達が行けなくなってしまったのです。すると今度は教会のご夫妻が「上井さんが行くななら一緒に行きましょう」と仰ってくれて無事に現地に行くことができました。私はつつい宗教的に捉えてしまいがちですが、自分がこういう風にやりたいと思えば、今までも不思議とどこからか救いの手が差し伸べられたり、道が自ずと開けてきましたね。

大船渡では、真紗子さんが立ててられた大船渡サポートセンターのスタッフの方が迎えてくださいました。被災地の人たちに渡そうとマフラーを持って来たはいいものの、どうやって手渡したらいいかさえもわかりませんでした。すぐに老人ホームや施設の慰問をアレンジしていただき3カ所ほど回りました。また、幼稚園にも訪問してアメリカのキャンディーやドネーションの帽子などを配りました。震災の被害が大きかった陸前高田にも行ったのですが、町を見た時の衝撃が今でも忘れられません。「本当にここに人が生活していたのだろうか？町があったのだろうか？」と愕然としました。高いビルは倒壊、船は陸に乗り上げ、瓦礫はまとめて道の脇に置いてあったり、そこに新しく一本道が作られているような悲惨な状態でした。“百聞は一見に如かず”と言いますが、自分の目で被災地を見て来たことが私がこの活動にコミットしたいと強く思う転機にもなりました。

2回目に訪問したのは2012年の5月。ハワイにいる友達と大学の後輩と一緒に仮設住宅に足を運びました。仮設住宅にはお年寄りが多く生活していて、何かを届けるより一緒にアクティビティをしたらどうかと思い、飾り皿を作るクラスを開催したんです。現地では材料を入手するのが困難でしょうから、こちらでスタイルフォームなどの材料をまとめて買い込んで持ち込みました。ハワイから来た友達はフラダンスを教えて、皆さんから踊って楽しかったと喜んでいただきました。主にこういったクラスに参加されるのは女性が積極的で、仮設住宅のマネージャーに話を聞いても、男性が引きこもりがちになってしまうことの方が多いのだとか。ある仮設住宅では、炉端カフェという憩いの場を作って、美味しい飲み物を提供して男性も気軽に参加できるような雰囲気にしていましたね。あれはいいアイデアだと思いました。

2013年の11月に3回目の訪問をした時のことです。大船渡ホテルという改築された町中のホテル

ルに泊まりましたが、ホテルの内装は綺麗なのに窓の外は殺伐としていて、町の開発はまだまだと感じました。2014年11月に訪問した時には、陸前高田には新しい防波堤ができていましたし、高台には宅地造成地が整備され、皆さんが家を建て始めたりしていました。仮設住宅からは30%ほどの人が出られたそうです。働ける人は職を求めて外に出て行くので、残っているのはお年寄りばかり。町に若い人はあまり居ませんでしたね。現地の方から、「毎年来てくれる人たちが少なくなってきて、私たちはもう忘れられてしまったのでしょうか？」と言われたことが心に突き刺さりました。「充分物資の支援はしていただいたから、会いに来て話をしてくれるだけで嬉しい」と仰っていましたね。まだ被災地の皆さんは心に痛みを抱えたままなのだと痛感した一言でした。また、今秋も仮設慰問に参ります。

“意思あるところに道あり”草の根活動を続けたい

2013年、大船渡の鵜浦真紗子さんのお父さん（左端）を訪ねて。鵜浦さん（左後ろ）、テッド・タナカさん（右後ろ）、高田さん（中央）と共に

ここロサンゼルスでは地震や津波に遭う可能性は高いです。もしもの災害に備えるためにも日頃の心構えや防災訓練の必要性を訴えることが大切だと思っています。Love to Nippon Projectのそういったメッセージに共感し協力したいと思い、同じ志を持つ仲間たちと共に実行委員を務めています。

信条としている言葉に「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」、「意思あるところに道あり」があります。最初からできないと頭で考えるのではなく、まずは一步踏み出してみたい。私も東北を支援したかったけれど自分1人では何をしたらいいのかさえわかりませんでした。新聞の記事を読んで連絡をしたことがきっかけとなり、今こうして東北の皆さんと繋がっています。できるかできないかはやってみないとわからない。まずは一步踏み出してみたい、そう若い人たちにはこれからも身をもって伝えていきたいですね。

Love to Nippon Project 実行委員 上井貴代子さん

Kiyoko Kamii ■1937年2月、東京目白で生まれる。戦争を経験、茨城県大洗町に疎開、中学一年の時東京に戻る。立教女学院高校、1959年に立教大学文学部英文科卒業後、三井物産入社。1964年、東京オリンピックの時は旅行社でツアー・セールス、ガイドに携わる。1967年、日系三世の男性と出逢い渡米、翌年結婚。2児の母親となる。アダルトスクールやコミュニティ・カレッジで会計学を学び、タカセ・アソシエーツ、三菱レイヨンLA支店、King International Groupで会計の仕事に従事。計20年働き、2002年に退職。仕事と主婦業を両立させながらAAJW（American Assoc. of Japanese University Women）、女声コーラス森の会、ロサンゼルス合同教会、米国書道研究会、日米婦人会、LA立教会、Love to Nippon Project等に属し、コミュニティ活動を続行中

(QOLA2015年03月号掲載)

<http://qola-la.com/articles/443/>

第8回「日米交流ロサンゼルス朗読会」のお知らせ

夫婦共々、立教大学の卒業生ということで、毎年、私共の開催する「日米交流ロサンゼルス朗読会」に献身的なご協力を頂いています。知己の少ない海外で、いつも身近に応援していただける校友が存在するという事は、どれほど私達を勇気づけてくれたか測りしれません。今年8回目を迎えますが、皆様のご支援あってのことと感謝しています。2010年には、LA立教会の50周年記念として「舞と朗読の平家物語」に微力を尽くさせていただきました。

今年も別添「実施要項」により、6月20日（土）2時より、リトル東京「禅宗寺」において開催いたします。

一人でも多くの校友にご観覧頂きたく、毎年、チラシと招待券を用意しています。現在制作中ですが、出来上がり次第、貴方様宛に送らせていただきますので、お手数ながらご配布頂きたくお願い申し上げます。ぜひ当日は会場へお越し頂き、ご観覧、ご批判いただきますようお願い申し上げます。

突然で恐縮でございますが、取り敢えず、ご挨拶とお願いをさせていただきました。よろしくお願ひ申し上げます。

堀田 謙一郎

第8回「日米交流ロサンゼルス朗読会」実施要項

【開催日時】 6月20日(土) 午後2時開演～4時（1時30分開場）

【開催場所】 リトル東京・禅宗寺

【主催他】 主催 朗読ネットワーク日本
LA朗読グループ
後援 曹洞宗北米別院禅宗寺

【朗読出演者と演目】

堀田 紀真・・・戸田 宏明作『人情・安宅の関』
木村 秀隆・・・森 鷗外作『高瀬舟』
下郡 朋子・・・山本 兼一作『利久にたずねよ』
川崎 香・・・森 鷗外作『最後の一句』
金子ミツ江・・・斉藤 隆介作『花さき山』
奥野 幸雄・・・桂 文我作『えんぎかつぎのだんなさん』

□その他、コーラスグループ「アンサンブルエコー」等のゲストを予定しています。

【お問合せ】 *禅宗寺・・・123 South Hewitt Street
TEL 213.624.8658（担当・小島）

*入場無料、駐車場有。公演終了後に軽食を用意しています。